第十九回　齋藤茂吉短歌文学賞

永田　和宏　『後の日々』

角川書店

選考委員

委員長　岡井　隆

委　員　小池　光

三枝昂之

馬場あき子

（五十音順）

永田　和宏　『後の日々』（自選）

平然と振る舞うほかはあらざるをその平然をひとは悲しむ

我がみつけたる遺伝子七つわれの名ときりはなされて残りゆくべし

やりなおしのきかざる生をよしとして昼を飲むなり飯屋の二階

こらえいし笑いがいっきに弾けてより娘の笑いとまらざりけり

人の死はいつも人の死いつの日ぞ人の死としてわが悲しまる

亀はみなむこう向きなり老いるのもいいものだぜとうつらうつら

首をあげればそこがあの世というように薄目の亀が風を感じいる

がんばっていたねなんて不意に言うからたまごごはんに落ちているなみだ

そこがあなたの岬でもあるというように光翳ろうなかの頬杖

君よりもわれに不安の深きこと言うべくもなく二年を越えぬ

ともに嘆くということをせぬわれを悲しんでいる人は眠りぬ

●選考委員による選評

進境いちじるしい歌集

岡井　隆

「後の日々」は著者の第十歌集でありますが、それまでの歌集にはない特徴があります。

「後の日々」の「後」とは妻が乳癌の手術をうけたあとの期間をさしています。その間に作者が生活のあいまに妻や家族たちに向けるまなざしがどの歌にも感じられます。といっても情に溺れた感傷ではなく、時としては冷酷といってもいいほどの客観性をもった立場で歌っており、それがかえって初老期の夫婦愛の実態を示しているともいえます。

作者は技巧にすぐれた歌人ですが、他方で国内外の専門学会の長をつとめる分子生物学者であり、国立大学の教授として多忙な公的な仕事をこなしています。そのさまもこの一巻の歌集には折々にあらわれています。

4人の選考委員が揃ってこの歌集を推したのは昨年出版されたどの歌集にくらべてもすぐれていると思ったからであり、また、著者としても一時期を画した進境いちじるしい歌集だと思ったからであります。

充実の一冊

小池　光

永田和宏氏は、いまだ学生の頃から現代短歌の次の担い手としてエネルギッシュに活動してきた。今日に至るまでその短歌への熱意と仕事ぶりは一貫して途切れることなく、常に短歌界の先頭にあってその現代的可能性を追究してきた。短歌というわが国古来の伝統文芸と、現代科学の最先端を担う有能なサイエンチストとしての営為と、その両突端をあえてみずからの生の立脚点に定め、清新で、太々とした抒情の声を端的率直に歌い上げる作風は類のないものである。『後の日々』はその十冊目の歌集にあたり、人生でもっとも多忙でかつ老いの入り口にさしかかる屈折した五十代の時間を、ある意味でごく淡々と無防備に、またある意味で一種の諦観を引き連れながら歌い、いかにも充実を感じさせる。まこと相応しい一冊を得たことをよろこぶ。

相聞歌の年輪

三枝　昂之

永田氏は造型性あざやかな青春歌で昭和五十年代の短歌に新風を吹き込んで以来、常に歌壇の牽引力として活躍してきたが、『後の日々』はその永田氏の軌跡の中でも特に注目される一冊である。『後の日々』の「後」は連れ合の河野裕子さんの病後という時間を意味しているが、そのことがこの歌集の特徴を端的に示している。長く連れ添ってきた男女でなければ通わせることのできない相聞の香り。命を意識したときに見えてくる風景や市井の健気な営みへの心寄せ。さまざまな重責の中にいる還暦近くの孤独。

年齢を重ねなければ見えてこない世界の奥深さがここにはあり、そのことを教えてくれる大切な成果として、『後の日々』の受賞を喜びたい。

平明な視野の知性

馬場　あき子

六十代に入って思う生老病死は、身辺の現実をつぶさにみつめてきた生活感を含みつつ、しだいに濃い思いとなってゆく。『後の日々』にはそうした時期の不安や寂寥を内攻しつつ視野にある風景がよくうたわれており、抒情の質に重みが加わっている。しかしそれは深刻さには赴かず観照の折ふしに表れるユーモアのゆとりがほのかなさびしさとともにある。

多忙の中にある人間の時間は、しばしば呆とした少時に奇妙なことを思いついたり、変なものがみえてきたりするものだが、それらも魅力的な歌の素材となっており楽しい。またそうした時に登用される思いがけぬ言語も新鮮である。

受賞の言葉

永田　和宏

斎藤茂吉ほど貪食能の大きな歌人は、近代以降だれもいない、と思っている。清濁、なんでも飲み込んで平然としている。得体の知れない懐の深さがなによりの魅力である。数年前、岡井隆、小池光両氏とともに茂吉の魅力を探るべく共同討議を1年にわたって続け、『斎藤茂吉―その迷宮に遊ぶ』などという本になったこともあった。茂吉の名を冠した賞をいただけるのは、何にも増してうれしい。

歌集『後の日々』は、私には特別に思いの深いものとなった。妻の思いもかけない癌の手術があった。その後の日々はまた、再発の不安に揺れる妻との日々であった。自分たちに残された時間は、いずれにしても有限のものでしかないというあたりまえの、しかし厳然たる事実が、ようやく実感として迫ってくるのを感じた。死も老いも決して観念のなかのものではない年齢にさしかかったということか。

すでに四十年を越えて歌を作り続けてきたが、結局は歌を通してしか、自分の時間は残らないのだと今になって思う。で、あってみれば、せめて自分の「いま」という時間に嘘だけはつかないで歌を作り続けるしかないのだろう。あとどのくらい歌人としての時間が残されているのかはわからないが、まあゆっくりと自分の「いま」を歌っていくしかないだろうと思えば、少しやすらかな気分にもなるのである。

第19回　齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

永田　和宏　(ながた　かずひろ)

歌人。京都大学再生医科学研究所教授。
1947年（昭和22年）滋賀県生まれ（60歳）。
京都市在住。京都大学理学部物理学科卒。理学博士。
在学中に「京大短歌会」、「塔」に入会し、現在「塔」主宰。
朝日新聞歌壇選者。アジア太平洋細胞生物学会副会長。

歌　集
「メビウスの地平」、「華氏」、「饗庭」、「荒神」、「風位」

評論集
「表現の吃水―定型短歌論」、「喩と読者」、「作歌のヒント」

受賞歴

平成９年	「華氏」	第２回寺山修司短歌賞
平成11年	「饗庭」	第３回若山牧水賞
		第50回読売文学賞詩歌俳句賞
平成16年	「風位」	第54回芸術選奨文部科学大臣賞
		第38回迢空賞

これまでの受賞者

第一回　岡井　隆　『親和力』砂子屋書房
第二回　本林勝夫　『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』桜楓社
第三回　塚本邦雄　『黄金律』花曜社
第四回　前登志夫　『鳥獣蟲魚』小澤書店
第五回　斎藤　史　『秋天瑠璃』不識書院
第六回　近藤芳美　『希求』砂子屋書房
第七回　小暮政次　『暫紅新集』短歌新聞社
第八回　馬場あき子　『飛種』短歌研究社
第九回　吉田　漱　『「白き山」全注釈』短歌新聞社
第十回　佐佐木幸綱　『呑牛』本阿弥書店
第十一回　伊藤　博　『萬葉集釋注』集英社
第十二回　森岡貞香　『夏至』砂子屋書房
第十三回　竹山　広　『竹山広全歌集』雁書館・ながらみ書房
第十四回　藤岡武雄　『書簡にみる斎藤茂吉』短歌新聞社
第十五回　清水房雄　『獨孤意尚吟』不識書院
第十六回　小池　光　『滴滴集』短歌研究社
第十七回　三枝昂之　『昭和短歌の精神史』本阿弥書店
第十八回　花山多佳子　『木香薔薇』砂子屋書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局
〒九九〇―八五七〇
山形市松波二丁目八―一　山形県文化環境部県民文化課内
TEL・〇二三―六三〇―二三〇六